

氏名：包 嶺小

氏名のローマ字表記：ハウ リンショウ

所属：滋賀県立大学

専門分野：人間文化研究科地域文化学専攻

発表のタイトル：東部内モンゴルにおける日本の家畜品種改良事業の試み

日露戦争以後、日本は東部内モンゴルにおいてモンゴル種羊をメインとする家畜の品種改良事業に着手して終戦までつづいた。モンゴル種羊の品種改良事業に関しては明治維新直後から、毛織物を原料とする近代的軍隊の軍服の需要が高まったことにより、モンゴル種の羊を日本に輸入して品種改良が行われたが、まもなく挫折した。このようなモンゴル種羊の品種改良に対するこだわりは、日露戦争以後、東部内モンゴルへの利権獲得にともなっていよいよ現場で行われるようになった。明治初期日本国内で実践され、挫折したモンゴル種羊に対する品種改良を東部内モンゴルで実践した最初の人物はカルピスの創業者で知られている三島海雲や後の満鉄であった。

三島海雲は日露戦争のときに内モンゴルで軍馬を調達して前線に送ったことなどで知られてきたが、その間 1909 年からオーハン（敖漢）旗において牧場を確保し、モンゴル種羊の品種改良を行ったものの、清朝の崩壊にともなって事業が失敗した。一方、満鉄は 1913 年から公主嶺、林西、沙里など東部内モンゴルの各地において種畜場を相次いで設立し、家畜品種改良事業を展開した。

本発表では、20 世紀初頭における三島海雲や満鉄の初期の家畜品種改良事業を通して、日本の内モンゴル進出における家畜品種改良の歴史的な位置付けを考察したい。